旅跡の旅・シルクロード

井上　靖

新潮社版

遺跡の旅・シルクロード

著者　井上靖

昭和五十二年九月　五日　発行
昭和五十三年三月二十日　六刷

定価　一八〇〇円

© Yasushi Inoue,
Printed in Japan
1977.

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
〒162　東京都新宿区矢来町七一
業務部・(〇三)二六六—五一一一
編集部・(〇三)二六六—五四一一
振替東京四—八〇八番

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　神田　加藤製本

オフセット印刷　錦明印刷株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

〈遺跡の旅・シルクロード〉目次

〈I〉西トルキスタンの旅
第一回 西トルキスタン紀行
ピャンジケント 8
タシケント 27
ブハラ 40
サマルカンド 58
ドシャンベ 83
アシュハバード 87
第二回 西トルキスタン紀行
フェルガナ盆地 96
アム・ダリヤ下流 111
天山の麓の国 126
〈II〉オリエントの旅
アフガニスタン紀行

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

古い隊商路 142
バーミアン 151
クンドゥズ 160
マザリ・シャリフ 169
バルフ 176

オリエント古代遺跡を訪ねて

アフガニスタン 188
イラン 196
トルコ 204

エジプト、イラク紀行

ナイルの流れ 214
ノアの洪水地帯 220

＊

〈著者あとがき〉 226

外箱写真（サマルカンドのビビ・ハヌィム寺院遺跡）　永田一脩

表紙、本扉、地図扉絵　矢崎虎夫

口絵（黒白写真）　永田一脩

（カラー写真）

バーミアン（I・II）、イラン高原　風見武秀

イスハハンのマスジッド・イ・シャー、クンドゥズ、ボストの遺跡、ペルセポリス、カッパドキア高原、カルナック神殿、カスピ海　井上靖

地図（原稿作成）　永田一脩

（図版作成）　〈玉木図版社〉

遺跡の旅・シルクロード

第一回　西トルキスタン紀行

ピャンジケント

紀元八世紀以前に、ソグド人が経営し繁栄した都邑（とゆう）、古代ピャンジケントの遺跡が、ソ連の考古学者たちの手によって発掘中であるということは、中央アジアの歴史に少しでも関心を持つ者なら、誰でも知っている大きい事件である。

私は昭和四十年五月から六月へかけて、親しい友人たちと中央アジアを旅行したが、その時のスケジュウルの中に、古代ピャンジケントの遺跡の上に自分の足で立ってみることを組み込んでおいた。他のことを一つや二つ犠牲にしても、これだけは是非実現したいものだと思った。

中央アジアの八世紀の都市は、言い換えればアラブ侵入以前の都市は、言うまでもなく発掘された遺跡でしか見ることはできないが、それも大々的なものとなると、この古代ピャンジケントの遺跡しかない。大体中央アジアの西半分（西トルキスタン）は、過去において二つの大きな悪夢を経験している。ひとつは八世紀のアラブの侵入であり、ひとつは十三世紀のモンゴルの侵略である。この二回の暴虐極まりない異民族の遠征によって、都市という都市は破壊され、おびただしい人命は失われ、中央アジアの西半分は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

全くその相貌を改めた。古代ピャンジケントはアラブの侵入によって破壊され、長く廃墟になっていて、いつか土中に埋まってしまった城邑である。その土中の廃墟が千二百年後の今日、陽の光を浴びて、その大きい姿勢を横たえているというのであるから、私でなくても誰もがこれを眼に収めたいと思うだろう。

私たちがサマルカンドへはいったのは五月二十日であった。一行は加藤九祚、野村尚吾、福田宏年、永田一脩の諸氏、それに私と私の息子修一。市内に散らばっている名所や旧跡を見て回るのに四日間を過し、ピャンジケントへ向ったのは二十四日であった。サマルカンドから七〇キロ、らくに日帰りのできる行程である。

サマルカンドはタシケント、ブハラと共に、ウズベク共和国の都市であるが、ピャンジケントはタジク共和国の町である。したがって私たちは、ウズベク共和国からその隣国へ向うわけであるが、同じソ連邦に属する民族単位の小共和国なので、手続きの上でも、気持の上でも、他国へ向うといった煩わしさは一切ない。サマルカンドとピャンジケントは、今でこそそれぞれ属する共和国は異なっているが、共に同じザラフシャン川に沿っており、往古はこの地方一帯にソグド人が住みついていて、ソグド人が経営したザラフシャン・オアシスの二つの中心都邑であったのである。

ザラフシャンという川はパミール高原の氷河に源を発し、ザラフシャン山脈とトルキスタン山脈に挟まれた渓谷を流れ、沙漠地帯にはいると、その周辺にオアシスを形成し、ピャンジケント、サマルカンド、ブハラといった都邑を生んでいる。そしてその末端が沙漠の中に消えていることで長く知られていたが、現在はその水は沙漠の中に消えることを許されず、大きい人造湖に受け留められ、発電や灌漑に利用されている。

サマルカンド市内のホテルを出た私たちのくるまは、土屋の並んでいる裏通りを抜けて、ピャンジケント街道に出る。サマルカンドの郊外はのどかで美しい。麦畑、葡萄畑、綿畑、ケシ畑、葱畑などが、道の両側に並んでいる。葡萄は葡萄酒を作るだけの、丈の低い小さい種類である。時々小聚落を過ぎる。家は土屋で、いずれも白い土塀を廻らしている。それに混じって、灰色の荒壁の土塀も見える。

三十分ほど走った頃、右の窓から雪を頂いた山脈が見えて来る。サマルカンドの町を出た時から道はかなりひどくなっていたが、大きく折れ曲がってコルホーズにはいるところから舗装された大通りになり、ドライブは快適なものになった。

コルホーズを出ると、右手の山脈が徐々に堂々たる山容を見せ始める。ザラフシャン山脈、詳しく言えばその支脈であるハラブ山脈で、雪を頂いた稜線が青く澄み渡っている空に、長いゆるやかな線を描いている。道はいつか大平原の中の一本道となり、時折驢馬の群れや羊の群れが行手に現われ、その度にくるまは徐行を余儀なくされる。

やがて左手にも山脈が現われて来る。この方はトルキスタン山脈、これも正確に言えばその支脈で、土地の人は太陽山脈と呼んでいるということだが、地図には出ていない。私たちのくるまは、その二つの山脈の間に分けいって行こうとしており、次第に両側の山脈は近づいて来る。この二つの山脈が相接している所の氷河に源を発しているザラフシャン川を渡る。灰色の川である。流れも灰色なら、岸の砂もまた灰色である。

小さい聚落を過ぎる時、時折はっとするような美しい風景にぶつかる。灰色の荒壁の土塀の上に、雪の山脈が置かれてあって、空には白い雲がゆうゆうと浮かんでいる。

左右両山脈が急速に近づいて来る頃から、辺りは高原の様相を帯びて来、ケシ畑と麦畑を点綴して、原野が拡がっている。私たちは高原の一角でくるまを停めて、それぞれカメラを持って車外に出た。どこを見ても写真になる風景なのだが、カメラがこの美しさを、そのままレンズに収めてくれようとは思われない。

再びくるまに乗ると、十分ほどで国境に着く。国境といっても道路に簡単な遮断機があり、その横に小屋掛けの検疫所があるだけである。何でもザラフシャン川の上流地区に、蛾口傷という家畜の口中にふきでもののできる病気が流行していて、人間には伝染しないが、家畜には伝染するという。検疫員が数名出て来たので、私たちはその指示に従った。ホルマリン液の中に靴の底をつけ、靴の表面をホルマリン液で濡らしたブラシでこする。ズボンの裾の方にも同じようにホルマリンを塗る。自動車の車体も同様にホルマリンで洗われている。

国境を越えると、タジク共和国である。くるまは道の両側に迫っている二つの山脈の中にはいって行く。十分ほどで大きい聚落にはいる。そこが目指すピャンジケントであった。サマルカンドから一時間五十分かかっている。タジクの風光もウズベクと全く同じだった。ただ道に遊んでいる子供たちの服装に、原色が多く用いられているのが目立っている。

女の服装は、私たちがウズベク共和国の各地で見て来たものと全く同じで、いずれもゆるやかなズボンを履き、模様のあるワンピースの服を纏い、同じく模様のあるチョッキを着、さらにその上から派手な色の、日本の東北地方のカクマキに似たものを、頭からかぶって上半身を覆っている。まるで真冬の装束であるが、これが夏の陽ざしの中で見かける服装であるから驚く。

男子たちは、ウズベクと同様、それぞれ体内に匿し持っている血の混合の処方箋によって——そうとで

も言うしか考えられないような、まちまちな服装をしているが、ただ長靴を履いている者が多くなっていることが、注意をひいた。遊牧民としての名残りが、この地方の人たちに強く残っているのかも知れない。

現在のピャンジケントは、トルキスタン山脈の、詳しくいえばその支脈の、太陽山脈の麓の町である。フランスなら、モンブランの麓のシャモニーといったところであろうか。どこかに、そうした山の町としての共通した性格が感じられる。一年中雪を頂いた山が見え、澄んだ空気が流れ、もうこの先には人間の住んでいる町がないといった落着きが、ここに住む人たちの顔に現われている。

ただ、ピャンジケントがシャモニーと異なるところは、山の町であるとともに、あるいはそれ以上に、ザラフシャン川にその運命を任せている川の町であるということと、過去に大きい民族の悲劇を持っているということである。

私たちが、その土を踏みたいと思っている古代ピャンジケントは、町から指呼の間に望める南方の丘上にある。その丘上の町から、さらに現在の町より上流の箇処に、そしてそこから現在の場所へと、三度、この町はその位置を変えている。丘上の古代ピャンジケントが廃墟になったのは、先述したようにアラブの侵入によるものであるが、その後経営した上流の町がいかなる理由で廃墟となり、現在のピャンジケントに移るに到ったかは、今のところ大きな謎として残されている。

この一事をもってしても、このピャンジケントという町が、容易ならぬ歴史を背負っている町だと言うことができよう。その歴史について語る前に、古代ピャンジケントの遺跡について紹介する前に、この町の持つ、美しい玩具のような小さい博物館について語らなければならない。

博物館はピャンジケントの町の入口にあった。私たちはまずそこにはいった。門から正面入口までの敷石道の左右に、バラの花が美しく咲き乱れている。

私たちは半月ほど前、中央アジアの玄関口ともいうべきタシケントの空港へ降り立った時、その空港の花壇にバラの花が咲き乱れているのを見たが、それ以来、毎日のように到るところでバラの花にお目にかかっている。ホテルでも、公園でも、花壇という花壇には必ずバラが植わっており、しかもその花は花弁を大きく拡げて、寝乱れたような満開の姿態を見せている。

強い陽光の下に咲き盛っているバラの園というものは、その美しさの中に空虚なものがあって、何となく廃園といった感じである。バラの花の多いのはウズベク共和国だけのことかと思っていたが、パミール高原の国であるタジクにおいても、私たちはまたバラの花にお目にかかったわけであった。

考古学者である館長さんの案内で、私たちは館内を一巡した。二十年前にできた博物館で、正確にはルダキ記念地誌博物館と呼ばれる。ルダキは八五八年にピャンジケントの東六〇キロにあるブンジ・ルダクというところに生れ、サマン朝のナセル二世に宮廷詩人として仕えた人で、中世タジク文学の祖と仰がれており、博物館はこの詩人の名を冠しているのである。

私たちはここでパミール高原というところがいかなるところであるか、そこに住む人々の生活がいかなるものであるか、そういうことを知る上に役立つ多くの物を見た。各部屋の陳列品は、まさに地誌博物館の名にふさわしいもので、動物の剝製もあれば、植物の標本もあり、生活の道具もあれば、出土品もあった。

タジク共和国はパミール高原の国であり、私たちの居るピャンジケントはパミール高原の入口である。パミール高原というと、私たちは何となくその呼び方から高原地帯を想像しがちであるが、恐らくこれほ

ど大きい間違いはあるまいと思われる。

パミールは四時雪を頂き、それぞれが氷河を持った山塊群の巨大な集積であって、大部分が人跡未踏の地である。折り重なっている山脈と山脈との間のひだひだに、古来人間は住みついて来たが、そうしたところは極く僅かである。

地図を見ると、西トルキスタンと、今は中国の新疆ウイグル自治区に包括されている東トルキスタンとの間を、天山とパミール高原が遮っている。私たちはこんどの旅行で、この二大山系のほんの一部を機上から見たに過ぎないが、東西トルキスタンの間に横たわっている巨大な障壁は、それまで私たちが想像していたような生易しいものではなかった。

この地帯をシルクロードが曲がりくねりながら走っているわけであるが、シルクロードというものについてもまた、私たちは考えを改めなければならなかった。あらゆるものを拒否しようとしている神の意志に対する人間の闘いのようなものとして、それを考えなければならなかった。

それはともかくとして、そのパミール高原について、私たちはこのピャンジケントの地誌博物館において、いろいろなことを教わった。大トカゲ、コブラ、小牛大の野猪、羚羊、熊、毒蜘蛛、大亀、兎、小さい猪、スーロク（鼠の一種）、大鷲、等々いずれもピャンジケント周辺で捕ったものだという。玄奘三蔵（げんじょうさんぞう）や法顕のパミールを越える時の紀行を、ただこれだけのことでも、改めて読み直さなければならぬ気持にさせられる。

アスアリと呼ばれる、鳥葬の時使われる骨壺があった。縦六〇センチ、横三〇センチほどの大きさの陶器で、もちろん出土品である。鳥葬は、アラブと共にイスラム教がはいって来てから行われなくなったが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com